

## ◇ 国 語

国 5－1～国 5－19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

いきなり大きな物語から入るが、驚かないでいただきたい。宇宙の大原則に「エントロピー増大の法則」がある。エントロピーとは乱雑さのことであり、この世界のすべてのものごとは、時間の経過とともにエントロピーが増大する方向に進む。

a な白亜の神殿も年月とともに風化・崩壊し、フェルメールの傑作でさえも退色し、機器もソ<sup>↑</sup>ンモウする。

b してあつた机もあつという間にファイルや書類の山と化す。いかにすてきな恋愛もまもなく色褪<sup>あ</sup>せる。つまりこの世界では、あらゆる秩序は ア 崩れ、乱雑になっていく方向にしか進まない。

価値を生み出すこと。商品を作り出すこと。ビジネスモデルを考案すること。利益を生み出すことは、結局のところエントロピー増大の法則に抗<sup>あらが</sup>つて、乱雑さの中から秩序を創出することに他ならない。宇宙の大原則に逆らつて行う行為である以上——つまり坂を転がり落ちる岩を止めるようなものである以上——エネルギーがいる。そして、最終的には決して宇宙の大原則には勝つことができないゆえに、止めた岩はまもなく転がり落ちてしまう。つまり、イ 言えば、商行為とは、使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造すること、そしてその秩序が再び無秩序に還<sup>かえ</sup>るまでに、その状態を転移することである。たとえば、川底の土砂の中から、砂金を取り出してくること。精製は乱雑さの中から秩序を生み出す作業、つまりエントロピーを下げる行為である。だからそこに価値が生まれる。逆に、土砂の中に砂金を混ぜること。足し算なので価値が加算されるように見えて、一瞬にして価値は無に帰す。エントロピーが増大するからだ。いったん混ぜたものを再びセパレートするには膨大な労力を要する。しかも混ぜることは常に危険を孕<sup>はら</sup>む。混ぜることで、乱雑さがより拡散することになり、大きなリスクを生み出さう。

絶え間なく増大するエントロピーと必死に闘っているのは何も商社パーソンだけではない。もともと ウ エントロピー増大の法則と対峙<sup>たいじ</sup>しているのは何あろう、もともと高度な秩序を維持している私たち生命体である。いかにして？

私は生命のこの営為を「動的平衡」と名づけた。

生命にとって、エントロピーの増大は、老廃物の蓄積、加齢による酸化、タンパク質の変性、遺伝子の変異……といったかたちで絶え間なく降り注いでくる。油断するとすぐにエントロピー増大の法則に凌駕<sup>りようが</sup>され、秩序は崩壊する。それは生命の死を意味する。これと闘うため、生命は端から頑丈に作る<sup>はな</sup>こと、すなわち丈夫な壁や鎧<sup>よろい</sup>で自らを守るといった選択をあきらめた。そうではなく、むしろ自分をやわらかく、ゆるゆる・やわやわに作った。  
エ、自らを常に、壊し分解しつつ、作り直し、更新し、次々とボタンタッチするという方法をとった。この絶え間のない分解と更新と交換の流れこそが生きているということの本質であり、これこそが系の内部にたまるエントロピーを絶えず外部に捨て続ける唯一の方法だった。動きつつ、釣り合いをとる。これが動的平衡の意味である。

生命の秩序は、過去三八億年、エントロピー増大という宇宙の大法則と対峙しながら、今日まで連綿と引き継がれてきた。これはエントロピー増大の法則を打破ったという意味ではない。打ち負かされそうになりにながらも、絶えずずらし、避け、やり過<sup>す</sup>ぎしながら、ここまで来た、ということである。つまり生命は大勝することはなかったものの、大敗もしなかった。動的平衡を基本原理として、(大きく) 変わらないために (常に小さく) 変わり続けてきたからだ。

動的平衡の原理を、人間の営み、人間の組織に当てはめて考えることができるだろうか。生命は、細胞、タンパク質、DNAなどの構築物を作り出しているが、その作り方は基本的には一通りである。これに対して、細胞の解体、タンパク質の分解、遺伝子情報の消去や抑制の方法は、  
c、何通りもあり、いついかなるときでも分解がトドコ<sup>ど</sup>オらないように、何重にもバックアップが用意されている。つまり生命は、作ることも、壊すことのほうをより  
d にやっている。これは第一義的にはエントロピー増大を防ぐためだが、もうひとつ重要な意味を持つ。それは、常に動的な状態を維持することによって、いつでも更新でき、可変であり、不足があれば補い、損傷があれば修復できる体制をとっているということだ。だからこそ生命は、柔軟で環境に適応的であり、進化が可能になる。そして動的平衡において重要なのは構成要素そのものよりも、その関係性<sup>(三)</sup>

にある、という点だ。

自動車は走りながら故障を直すことなどできない。それは構成要素の機能分担が一義的に決まっていて、しかもその役割が機械論的なアルゴリズムの中に一義的に固定されているからだ。どれかひとつが壊れれば交換するしかない。

しかし生命の構成要素（細胞、タンパク質、遺伝子など）は、絶えず更新され、動的であるがゆえに、その関係性は可変的で柔軟だ。もし何かが欠落するとか、不足したとしても、増減を調整したり、ピンチヒッターになりかわったり、バイパスを作ったりして、問題にすぐに対処できる。構成要素はどれも基本的には多機能性であり、異なる役割を果たしうる。

さらに大切なことは、生命の動的平衡は自律分散型である、ということだ。個々の細胞やタンパク質は、ちょうどジグソーパズルのピースのようなもので、前後左右のピースと連携をとりながら絶えず更新されている。ピース近傍の補完的な関係性（相補性）さえ保たれていれば、ピース自体が交換されても、ジグソーパズルは全体としてゆるく連携しあっており、絵柄は変わらない。

新しく参加したピースは、郷に入っては郷に従えの言のとおり、周囲との関係性の中で自分の位置と役割を定める。既存のピースは、カンヨウをもつて新入りのピースのために場所を空けてやる。こうして絶えずピース自体は更新されつつ、組織もその都度、微調整され、新たな平衡を求めて、刷新されていく。

そして個々のピースは、いずれも必ずしも鳥瞰的に全体像を知っている必要はない。ローカルで、自律分散型で、しかも役割が可変的であること。これが生命体の強みである。生命は自律分散的な細胞の集合体であり、各細胞はただローカルな動的平衡を保っているだけだ。脳は生命にとって実は「中枢」ではない。むしろ知覚・感覚情報を集約し、必要な部局に中継するサーバー的なサービス業務をしているにすぎない。情報に対してどのように動くかはローカルな個々の細胞や臓器の自律性に委ねられる。

かつてサッカーの岡田武史元監督と対談したときのこと。読書家の岡田監督は、私の動的平衡論を読んで、高く評価してくださった。そして、これは組織論としても応用可能だ、各選手が、自律分散的に可変性・相補性をもって状況に対応できれば最強

のサッカーが実現される、というシュシ<sup>o</sup>のことをおっしゃってください。

この議論をさらに進めれば、自律分散的な動的平衡のサッカーにおいて、少なくとも試合のまったただ中においては、いちいち指示を出す必要のないゲームが実現するだろう。おそらく理想の組織とはそういうものではないだろうか。

生命と情報の問題について、エントロピーの視点から触れておきたい。生命活動にとって、環境から正しい情報を捉えて（餌のありか、パートナーの居場所、敵の動向、気温や酸素濃度……）、それに対して正しく応答することが生き延びるために必須である。つまり生命現象という秩序の維持には適切な情報を汲み取る<sup>くみと</sup>ることが必要だ。それを誤ると生命の秩序はたちまち平衡を失い、生存の危機に陥る。つまりエントロピー（乱雑さ）が急増してしまう。この意味において生命にとっての情報収集とは、負のエントロピーを得ること、つまりエントロピーの増大を遮減<sup>ていげん</sup>させる重要なブキとなる。ただし、誤ってはいけないのは、生命<sup>せいめい</sup>にとつての情報とは、私たちが普段使っている情報という言葉とは違うという点である。生命にとつての情報とは「変化（量）」である。気温や酸素濃度が急に下がること、血の匂いが立ち上ること、不審な音が聞こえること……その差分——今までなかったものが現れる、あるいはあったものが消える——そのような変化こそが生命にとつての情報である。

私たちはインターネット上の知識やデータなどを情報と呼んでいるが、それは静的なアーカイブ（蓄積）にすぎない。つまり単なる膨大な砂粒<sup>あ</sup>でしかない。その中から有用な砂金<sup>い</sup>を検出して選り分ける<sup>え</sup>こと、その行為が生命にとつての情報収集である。そして次のアクションに結びつかない情報は生命にとつて情報ではない。その意味でも生命は常に宇宙の大原則、エントロピーの増大と闘っているのである。

（福岡伸一『新版 動的平衡3 チャンスは準備された心にのみ降り立つ』による）

問一 傍線部 A・B・C・D と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ソンモウ

①モウゼンと抗議する

③金属がマモウする

⑤命令にモウジュウする

②モウシユウにとられる

④敵のカンシモウに引かかる

1

B トドコオらない

①タイヨウ年数を超える

③アネツタイ気候

⑤二列ジュウタイを組む

②タイクウ時間が長い

④タイゼンとした態度

2

C カンヨウ

①カundaiな処置

③知人からショカンが届く

⑤客をカndaイする

②カンヨウ植物

④イツカン性がない

3

D シュシ

①辞退するムネを伝える

③運命をツカサドル

⑤柱をササえる

②高いココロザシを持つ

④手当をホドコす

4

問二 空欄 a ・ b ・ c ・ d に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

a

① 美辞麗句  
④ 自由自在

② 壮麗豪華  
⑤ 優柔不断

③ 枝葉末節

5

b

① 有象無象  
④ 整理整頓

② 取捨選択  
⑤ 行雲流水

③ 暴飲暴食

6

c

① 言行一致  
④ 馬耳東風

② 一挙一動  
⑤ 千差万別

③ 上意下達

7

d

① 順風満帆  
④ 権謀術数

② 本末転倒  
⑤ 完全無欠

③ 一生懸命

8

問三 空欄

ア

イ

ウ

エ

一つずつ選べ。

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

ア

① 久しく

② 必ずしも

③ あたかも

9

④ あまねく

⑤ 重点的に

イ

① 否定的に

② やむをえず

③ 途方もなく

10

④ 存分に

⑤ ありていに

ウ

① 果敢に

② 抽象的に

③ 不活発に

11

④ 瞬時に

⑤ 等分に

エ

① 仕方なく

② いつもながら

③ 少なくとも

12

④ その上で

⑤ 確かに

問四 傍線部（一）「エントロピー増大の法則」とはどのようなものか？ その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

13

- ①この世界では、乱雑さの中から秩序を創出することが大原則であり、あらゆるエネルギーを用いて秩序を作り出す必要があるとする法則。
- ②価値を生み出すこと、商品を作り出すこと、ビジネスモデルを考案すること、利益を生み出すことが、エントロピーを増大させることになるという法則
- ③この世界において、あらゆる秩序は例外なく崩れ去り乱雑になるものであり、時間の経過とともに無秩序が増大する方向に進むという法則。
- ④使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造し、その秩序が再び無秩序に還るまえに、その状態を転移するという法則。
- ⑤この世界は、最終的には決して宇宙の大原則には勝つことができないゆえに、使ったエネルギーよりも作り出した秩序により大きな価値を創造できるという法則。

問五 傍線部(二)「動的平衡において重要なのは構成要素そのものよりも、その関係性にある」とはどういう意味か？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

14

- ① 生命の動的平衡は自律分散型であるので、個々の細胞やタンパク質は前後左右のピースと連携をとりながらも絶えず更新されるとは限らないということ。
- ② 生命は作ることよりも壊すことのほうをより重点的に行なっており、それによってエントロピー増大を防ぎつつ、さらに何重にもバックアップを用意できるということ。
- ③ 構成要素の機能分担は一義的に決まっていて、その役割が機械論的なアルゴリズムの中に固定されているため、どれかひとつが壊れれば交換することができるということ。
- ④ 動的平衡の原理を人間の営み、人間の組織に当てはめて考えてみた時、細胞、タンパク質、DNAなどの構築物の作り方は基本的には一通りであるということ。
- ⑤ 生命の構成要素はどれも基本的には多機能的に異なる役割を果たしており、さらに個々の組織もその都度、微調整され新たな平衡を求めて刷新されているということ。

問六 筆者は傍線部(三)「生命にとつての情報とは、私たちが普段使っている情報という言葉とは違う」と言うが、その違いとは何か？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

15

- ① 気温や酸素濃度が急に下がること、血の匂いが立ち上ること、不審な音が聞こえることなどはエントロピーを急増させる情報であるが、生命現象という秩序の維持には適切な情報ではないということ。
- ② インターネット上の情報は常に宇宙の大原則、エントロピーの増大と関わるものであるが、生命にとつての情報とは、静的な蓄積から次のアクションに結びつく必要がある情報であるということ。
- ③ 生命にとつての情報は自律分散的な動的平衡が求められるものであり、組織にとつての理想的な情報であるが、可変性・相補性をもって状況に対応しなければならぬような情報とは異なるということ。
- ④ インターネット上の知識やデータなどの情報は静的なアーカイブであるが、生命にとつての情報とは、生き延びるために必須の、生命現象という秩序の維持に必要な変化のことであるということ。
- ⑤ 生命現象という秩序の維持のために必要なものが、エントロピーを増大させる情報であり、生命の秩序を失わせるような負のエントロピーを得るための情報は、静的なアーカイブであるということ。

問七 波線(あ)「砂粒」と波線(い)「砂金」に該当するものの組み合わせとして正しいものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

- |                        |   |                       |
|------------------------|---|-----------------------|
| ① (あ) インターネット上の知識やデータ  | — | (い) 機械論的一義的なアルゴリズム    |
| ② (あ) 次のアクションに結びつかない情報 | — | (い) 秩序維持のために感知された差分   |
| ③ (あ) 可変的であるエントロピー     | — | (い) 膨大なエントロピーを下げる行為   |
| ④ (あ) 乱雑さの中から秩序を生み出す作業 | — | (い) 静的なアーカイブや蓄積       |
| ⑤ (あ) 環境から得られた正しい情報    | — | (い) 生命維持のため適切に精製された情報 |

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

音楽研究家の小泉文夫氏は世界中の民族の音楽を採集しましたが、その結果、音痴の民族というのはほとんど存在しないという事に気づきました。しかし、むろん皆無ではない。その数少ない民族のひとつが「カリブー・エスキモー」と呼ばれるエスキモーの人たちです。

あ、ここでひとつご注意を。音痴というのは、いわゆる西洋音楽的な視点から見たもので、それが絶対ではないということとは銘記しておきたいことです。いまここでわかりやすくするために使っている「音痴の人」という言葉を定義すると、次の二つができない、あるいはその必要性を感じない人たちをいいます。

(一) リズム(拍子)と一緒に取る

(二) 同じ音程で、あるいは和音で音を出す

さて、というような定義に当てはまる人を「音痴」だとすると、カリブー・エスキモーの人たちはまさに音痴、すなわち一緒にリズムを取ったり、同じ音や和音を出したりしない人たちなのです。

エスキモーには、鯨を獲るクジラ・エスキモーとトナカイ(カリブー)を狩るカリブー・エスキモーがいます。クジラ・エスキモーの人たちは音痴ではありません。同じエスキモーでも音痴なのはカリブーを狩る人たちだけです。

彼らも歌を歌いますが、二人で歌っても、音程や拍子を合わせることをしません。それに対してクジラ・エスキモーの人たちは、非常にリズム感がいい。同じエスキモーなのに、なぜこう違うのか。

それはクジラを獲るためにはリズム感が必要だからです。

クジラを獲るチャンスが年に二回しかありません。非常に少ない。しかもクジラが息を吸うために氷の割れ目に現われた、そ

の瞬間しかありません。そのときに、みんなで息を合わせて一斉にコウゲキする、それができなければ獲ることができません。一本や二本の銚が刺さってもクジラはびくともしません。みな銚が一斉に刺さってはじめて捕獲することができるのです。「せーの」で一斉に銚を投げる、そのためにはリズム感が必要です。

このようにクジラのような大型の獲物を捕獲するときには、みんなで息を合わせることが必要になります。ですからクジラ・エスキモーの人たちは音痴ではなくなるのです。それに対してカリブー（トナカイ）はひとりで捕獲できるので、他人と息を合わせる必要がない。音痴でも全然かまわないのです。

これはクジラだけではありません。私たち人類は、音楽によって生き延びてきたといえるかも知れません。

アウストラロピテクスと新生人類である私たちの大きな違いのひとつに、猛獣との関係があります。発掘されたアウストラロピテクスの頭蓋骨には猛獣に食われたような牙痕が多く残っていますが、これが新生人類であるクロマニヨン人になると激減します。

ア、人間が猛獣を狩った跡までもが残っています。

かつての人類は猛獣に狩られる存在でしたが、われわれ新生人類は、猛獣を狩るという、数少ない霊長類になったのです。これをブキの発達と考える人もいますが、それだけではないでしょう。

先年、マタギの方と山を歩く機会があったのですが、そのときに「熊が見えてから撃ったのでは遅い」と話をされていました。銃という飛び道具を携帯した熟練のマタギですらそうです。

想像してみてください。たとえば銃でもいいでしょう。あるいは現在入手し得るもつともエイリな刃物でもいい。それを与えられて「飢えたライオンと一緒に檻に入れ」と言われたら、「冗談じゃない」と思うでしょう。私たち人間は、一対一では、とても猛獣に立ち向かえたものではないのです。

人類が猛獣を狩ることができるようになったのは、数人、数十人が槍や弓などの飛び道具を同時に発射することができるようになったからなのです。あるいは猛獣を崖下に追い落とすようなイができたようになったからなのです。そのためには息のコントロール、すなわち息を合わせることが大切です。

クジラ・エスキモーの人たちは、クジラがいないときには歌を歌っています。それはただ遊んで歌っているのではなく、

**ウ** の人たちが、声を合わせ、リズムを合わせる練習をしているようなのです。

「息」という漢字の下に「心」がつくひとつの理由として、ある日人間は、心によって呼吸を合わせること、すなわちコントロールが可能になったということに気づいた、ということがあるでしょう。

そう考えると「心」をより多く使ったのが、農耕を主とする殷の人々ではなく、長年、定住地を持たずにユウボク・狩猟の生活を送っていた「狄」と呼ばれた中山国の人たちであったということも**宜なるかな**と思うのです。

さて、「息」という漢字に「心」がついた理由として、その逆、すなわち「呼吸によって心のコントロールもできる」と人が気づいた、そういうこともあるのではないのでしょうか。

中国の古典『莊子』には、真人の呼吸として「真人は踵で呼吸し、衆人は喉で呼吸する（真人之息以踵、衆人之息以喉）」ということが書かれています。

この踵による呼吸法は、我が国の白隠禪師によって有名になりました。白隠禪師は、いまでいうウツのような状態に陥ったときに、この呼吸法によって、その危機を脱したのです。

『莊子』に載る呼吸法は、心をもコントロールし得るものであり、そのころにはすでに人は、呼吸によって心をもコントロールが可能であるということに気づいていました。

道教の理想的人間である「真人」になる道として、莊子は踵呼吸をスィショウFしましたが、『莊子』の中には、このほかにいろいろな呼吸の方法が示されています。呼吸は、それによって心をコントロールし、そして「真人」、「至人」にもなり得るといふ、人類が獲得したシンプルで、しかしとても強力な**エ**なのです。

(二) 呼吸は心すらもコントロールできる、そういうことに気づいたのが「息」という漢字の下に「心」がついたひとつの理由ですが、それが「あはれ」ため息」のもつ力でもあります。「あはれ」が恋の乱れの束ね緒になるのも、ため息によって心がコントロールできるからなのです。

などというところ、「そんなこと言ったってなにかいやなことがあったときに思わずつく、あーあというため息が、心をコントロールできるなどとは思えない」、そういう方もいらっしゃるでしょう。

東ね緒が、「あーあ」というため息というのは、ちよつと解せません。実はこれには理由があるのです。

「あはれ」、すなわち「ため息」は、いまのため息とは違いますし、ただの呼吸でもないのです。

「ためいき」という言葉に漢字を宛てれば「溜め息」となります。また、昔の本にはためいきに「太息」、「長嘘」という字を宛てているものもあります。

「ためいき」とは、ただの息ではなく「太息」、すなわち太い息であり、また、「長嘘」、声にならない長い、長い呼吸なのです。

太息も長嘘も、ともに腹の奥から出る深い呼吸、すなわち内臓からの呼吸です。その意味では、内臓が動くというスプランクニゾマイの訳語が「あはれ（ため息）」由来の「憐れみ」というのは、正鵠せいこくを射た訳語だといえるでしょう。

そして「溜め息」という文字に注目してみれば、それはまさに腹にぐつと溜めた息をいうということがわかるでしょう。

能では、このような深い息を「コミ」といいます。

日本の芸能では「間」がとても大切ですが、能ではこれを息で取ります。それが「コミ」です。

たとえば能の打楽器である鼓には、音という点から見ると三つの要素があります。ひとつは鼓の音。あのポンという音です。

もうひとつは掛け声。ヨーとかホーとかいうあれです。このふたつは観客の耳にも聴こえます。

しかし、もうひとつ音としては全く聴こえない、無音の音、「コミ」があるのです。

コミに漢字を宛てれば「込み」になるでしょう。お腹の深いところにぐつと息を込めて間を取る。それがコミです。非常に深いところで取るコミがあれば、比較的浅いところで取るコミもある。このコミの取り方によって、強弱、スピード、高低、間合、すべてが決まります。

能では、鼓の奏者だけがコミを取っているわけではありません。謡を謡う人も、笛を吹く人も、舞を舞う者も、みな「コミ」を深い腹で取っています。

能には指揮者もリーダーもいません。それどころか、みんなが一斉に集まっただけの練習や稽古もない。しかも、集まる人たちは、役ごとにみな違う流派に属している人たちです。二日ほど前に一度、全体をざっと通すという「申合せ」はありますが、しかしそれはリハーサルとは全く違います。

#### カ

には本番は常にぶつつけに近い。何が起きるかわからない。無の状態、混沌の状態から始まります。

その無の状態、混沌の状態が、この無音の音（息）であるコミの共有によって、徐々に拍子（リズム）や位が作られていく。コミとは呼吸ですから生きています。時々刻々と変化します。ですから最初に「こんなリズムでいく」とか「こんな感じでいく」ということを決めることはできません。演目（曲）の進行に従って、徐々にできあがっていく。それが能なのです。

（安田登『日本人の身体』による）

注 エスキモー ……現在は「イヌイット」と呼ばれる。カナダ北部などの氷雪地帯に住む人々の総称。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A コウゲキ

- ① 文学をセンコウする
- ③ 不正がオウコウする
- ⑤ コウカが持続する

- ② 潔くコウサンする
- ④ ケガのコウミョウ

17

B ブキ

- ① シキ折々の景色
- ③ 繊細なショッキ
- ⑤ 昔ながらのキシヤ

- ② 新たな軍事キチ
- ④ キドウ修正をする

18

C エイリ

- ① きれいなルリ色
- ③ 慎重にスイリした
- ⑤ 両者のリガイが一致した

- ② 閲覧リレキを削除する
- ④ しばらくカクリする

19

D ユウボク

- ① 甘いユウワクに負けた
- ③ 彼女のユウシを忘れない
- ⑤ 空気中にフユウするほこり

- ② 一刻のユウヨも許されない
- ④ セイユウを目指している

20

E スイシヨウ

- ① 趣味はシヨウギだ
- ③ タイシヨウ的な二人
- ⑤ 思わずシツシヨウした

- ② ショウガク金で本を買う
- ④ 長いショウシュウ効果

21

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ・カ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

|   |        |         |        |       |    |
|---|--------|---------|--------|-------|----|
| ア | ①まさに   | ②それどころか | ③なぜならば | ④それゆえ | 22 |
| イ | ①衝動的判断 | ②残虐行為   | ③集団行動  | ④先見の明 | 23 |
| ウ | ①一方的   | ②奇跡的    | ③無関係   | ④共同体  | 24 |
| エ | ①思想    | ②思惑     | ③信念    | ④技術   | 25 |
| オ | ①わずかに  | ②確かに    | ③曖昧に   | ④立派に  | 26 |
| カ | ①感覚的   | ②本能的    | ③学術的   | ④感情的  | 27 |

問三 傍線部（a）「銘記して」・（b）「宜なるかな」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）銘記する

28

- ① 注意やもてなしの心を向けること
- ② 物事の動向などに注目すること
- ③ 心惹かれて没頭すること
- ④ 深く心に刻みつけて忘れないこと
- ⑤ 特定のものに対して注意を向けること

（b）宜なるかな

29

- ① 感銘を受けて深く心を動かすこと
- ② これ以上は我慢できないと思うほど嫌になること
- ③ 素晴らしさを感じて心を動かされること
- ④ もつともなことであると納得すること
- ⑤ 人の主張や要求を容認すること

問四 傍線部（一）「呼吸は心すらもコントロールできる」とあるが、その説明として当てはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

- ① 臨済宗の白隠禅師が踵での呼吸法の効果を身をもって示したとされるため
- ② 中国古典に記されている理想的人間になる道は呼吸と関係しているため
- ③ 現代ではマイナスの意味を持つ「ためいき」だが昔はプラスの意味で使われていたため
- ④ クジラ・エスキモーの人たちは息を合わせて獲物を捕るため
- ⑤ 内臓の奥深くから出る「ためいき」に由来する「あはれ」という心情を表す言葉があるため

問五 傍線部(二)「能では、このような深い息を「コミ」といいます」とあるが、「コミ」の説明として当てはまらないものを、次の①～⑤の中から選べ。

31

- ① 鼓の音の三要素の一つだが無音のため観客の耳には聴こえない「間」
- ② 能舞台における指揮者ともいえる鼓奏者が身体の深部で取る「間」
- ③ 能役者、地謡、囃子方など能舞台の全出演者が共有する「間」
- ④ コミの共有なくして能の舞台は成立しないほど重要なもの
- ⑤ 時々刻々と変化するため全員集まって練習できない息の仕方

問六 本文の内容と異なるものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

32

- ① 主要な獲物の種類によってエスキモーの人たちの音楽的資質は大きくことなる
- ② 新生人類以前の化石人類は猛獣に狩られる危険にさらされて生きていた
- ③ 呼吸は身体のみならず心をコントロールすることも可能にする
- ④ 古典芸能である能における「コミ」は演目ごとに決まっている
- ⑤ 無の状態から、「コミ」の共有によって拍子や位が作られていくところが能の醍醐味といえる